

旧住友赤平炭鉱立坑櫓

北海道赤平市

北海道空知地方には日本の近代化を支えた炭鉱施設の遺構が数多く残されている。赤平市の旧住友赤平炭鉱跡を訪ねた。赤平炭鉱は1938（昭和13）年に開鉱、その象徴ともいえる高さ約44mの櫓を擁する立坑は1959（昭和34）年から建設費20億円、3年半の歳月を費やして整備された。人員、炭車を昇降する2列4段のケージは秒速12mの巻上げ速度で深さ650mの坑内に到達する。ケージ1段に鉱員が18名乗り込む。計72名が時速43km超で東京スカイツリーをしのぐ深さまで降下した。当時、東洋一の炭鉱施設といわれ1950年代に最盛期を迎えた赤平は、その後のエネルギー革命の波にさらされ1994（平成6）年に閉山。およそ55年におよぶ歴史に幕を下ろした。

赤平から南へ車で一時間ほど、三笠市の幾春別町の静かな街並みの背後には旧住友赤平炭鉱の立坑櫓が屹立する。1960（昭和35）年に稼働を開始した立坑施設の最深度は約735m、高さは約51m。ドイツから最新技術を導入して建設された。赤平炭鉱はその技術を継承して整備されたという。いずれの施設も意匠性を超え、安全と効率性を約束することのみが使命かのように割り切った風貌。無骨な威容が圧倒的な存在感をもって迫ってくる。しかし、その構造に当時の建設、設備の最先端技術が駆使されていたことは確かだ。

現在、赤平では立坑櫓に隣接して「赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設」が整備され、実際に使用されていた多くの道具や図面などを目に見ることができる。専属ガイドとしてほぼ毎日この炭鉱遺産を案内する元炭鉱マンの三上秀雄氏は、当時の様子をユーモアを交えて紹介してくれた。「時代は変わってしまったが北海道の近代化、日本の戦後復興の立役者が石炭であったことは間違いありません。その事実を伝えていきたい。炭鉱事故の惨劇も幾度となく目にしてきました。あまり語りたくないエピソードですが、そうしたことを含め、真実を伝えていくことが使命だと思っているんです」。自宅の窓からは、不要な石炭や岩石などを積み上げた標高200m近いズリ山が見えるという。炭鉱マンの「血と汗と涙」でそびえ立つ山だと思ふやいた。ともすれば凡庸に聞こえるその形容が沁みるように深く心に刺さった。



専属ガイドの三上秀雄氏。「今、炭鉱の歴史を知り、残された施設群に触れることには大きな意義がある」と語る。北海道は明治初期から昭和の高度成長期にかけて6万人だった人口が100倍近くになる急成長を遂げた。その隆盛の一翼を担っていたのが炭鉱群だ。しかし、昭和30年代後半から石炭産業は衰退し、空知からも約50万人が去ることになった。北海道史の一端がこの炭鉱遺産に刻まれている



旧住友赤平炭鉱（三笠市）

